

マスカン語民話テキストと Differential Object Marking*

原 将吾

要 旨

本稿ではエチオピア・南部諸民族州グラゲゾーンで話されるマスカン語についてフィールドワークの成果を報告する。前半では収集した民話テキストの一つ「ハイエナとヒヒ」をグロスと共に示した。後半ではこのテキストに見られる目的語名詞句を伴う他動詞文の可能なヴァリエーションに基づいて、この言語で目的語標示がどのように現れるかを検討した。その結果、1) 動詞に付加される目的語一致標識は、目的語名詞句が定である場合に現れることができ、それが無生物の場合には欠落が許されるが、有生物の場合には許されないこと 2) 名詞に付加される目的語標識は有生物を表わす目的語には現れうるが、無生物の場合には現れないことが観察された。このことは Hara(2018)の仮説に沿うものである。

キーワード

DOM マスカン語 グラゲ諸語 エチオピア・セム語派

1 はじめに

本稿は筆者が 2019 年 9 月にエチオピア連邦民主共和国にて行ったフィールドワークで収集したマスカン語の民話テキストを、Differential Object Marking(DOM)に関する短い論考とともに示すものである。

マスカン語はエチオピア・南部諸民族州グラゲゾーン内のブタジラを中心に話される言語である。この言語の DOM には、すでに Hara(2018)において述べているように、名詞に付加されるマーカーと、動詞に付加され目的語の性数に一致するマーカーの 2 種類が関与する。Hara(2018)では、このマーカーが用いられる条件として目的語名詞句の有生性・定性の関与を指摘した。すなわち目的語名詞句が有生性・定性の階層(cf. Aissen 2003)で上位にあるほど目的語マーカーが現れやすく、下位になるほど出現しにくくなる、ということである。また、2 種類のマーカーの出現条件はそれぞれ異なると考えられること、及び有生

* 本研究は JSPS 特別研究員奨励費 JP 19J10473 の助成を受けたものである。

本稿の転写で用いる特殊記号を示す： ä = [e], č = [ɟ], ġ = [dʒ], š = [ʃ], y = [j]。これ以外は IPA に従う。

また本稿で用いる略号は以下の通り： 1/2/3 = 1/2/3 人称, ACC = 名詞に付加する目的語標示, AUX = 助動詞, CONV = 副動詞, DF = 定, F = 女性, IMPF = 未完了, IMPR = 命令, INDF = 不定, IP = 非人称, JUS = Jussive, M = 男性, NEG = 否定, OBJ = 目的語, PF = 完了, POSS = 所有, PROS = Prospective, REL = 関係詞, SBJ = 主語, SG = 単数。

性・定性はマスカン語の DOM を記述するに不十分であることも指摘した。本稿ではこの Hara(2018)の記述が今回の調査で収集したテキストにおける目的語標識の使用を説明できるかを検証したい。

2 調査について

マスカン語は上にも述べたように、エチオピア連邦民主共和国・南部諸民族州グラゲゾーン内のマスカン地区(中心都市：ブタジラ)で主に話される言語である。アフロアジア語族セム語派に属し、その中でも最も南で話されるグラゲ諸語と呼ばれるグループに含まれる。

インフォーマントは Hara(2018)の調査と同じ AH 氏である。氏はブタジラの生まれで、言語形成期を同地で過ごした人物である。その後も長年ブタジラで生活をしてきたが、2015 年以降は首都のアジスアベバに暮らしている。調査時現在の年齢は 60 代であった。

今回の調査は AH 氏が調査時現在居住する、アジスアベバ市内で行った。調査期間は 2019 年 9 月 17 日～23 日である。調査はマスカン語の民話を語ってもらい、それを録音した後、その書き起こしを行いながら英語訳を提供してもらうという手順で実施した。録音に使用した機材はパナソニック製 IC レコーダー(RR-XS470)で、機械本体のマイクを集音モードにて使用、録音設定は PCM 方式・標準化周波数 44.1kHz である。録音時には機械を AH 氏に持ってもらい、マイクに向かって吹き込むように指示した。

3 テキスト

本節では、今回の調査で収集した民話 *g^wäčänna zang^yära* 「ハイエナとヒヒ」のテキストを日本語訳と共に示す。なおマスカン語テキストには形態素分析とグロスを付与し、日本語訳は文と考えられる単位ごとに示す。

- (1) bat mädär at g^wäčä at zang^yära räkkäbä
 b-at mädär at g^wäčä at zang^yära räkkäb-ä
 で-INDF 場所 INDF ハイエナ INDF ヒヒ 得る.PF-3.SG.M.SBJ
 「あるところで、ハイエナが一匹のヒヒを得た」
- (2) zang^yärai yiß^wäränne
 zang^yära-i yi-bärä-^wn¹-e
 ヒヒ-DF 3.SG.M.SBJ-食べる.IMPF.-3.SG.M.OBJ-PROS²

¹ ^w はそれが可能な子音に対して付加される。またそのような子音が語幹に存在しない場合には現れない。

² cf. Meseret (2012: 54)。Meseret (2012) では非過去時制の助動詞-*u* が必要とされているが、ここでこれを欠くことについては、この動詞が本動詞ではなくその後の *tizzägağğ* に支配されると考えることで説明ができると考えられる。

tizzägağğ

tizzägağğ

準備ができる.IMPF.3.SG.M.SBJ

「(ハイエナは)そのヒヒを食べる用意ができています」

- (3) ta:w attbre: bädengahä
 ta:w a-t-bre: bä-denga-hä
 やめる.IMPR NEG-2.SG.M.SBJ-食べる.JUS ~によって-子どもたち-POSS.2.SG.M
 tirähibb yiβun
 ti-rähibb yi-βun
 2.SG.M.SBJ-得る.IMPF 3.SG.M.SBJ-言う.IMPF

「『やめろ、食べないでくれ！お前はお前の子どもたちによって(よいものを)得る³(のだから)』と(ヒヒは)言う」

- (4) g^wäčäi min denga yatkeši
 g^wäčä-i min denga y-atkeši⁴
 ハイエナ-DF 何 子どもたち 3.SG.M.SBJ-呼ぶ.IMPF
 iyyä äbärähäyyäw baräm afäwta
 iyyä ä-bärä-häyyäw bar-ä-m af-äwta
 私 1.SG.SBJ-食べる.IMPF- ? 言う.PF.-3.SG.M.SBJ-CONV □-POSS.3.SG.M
 käffätäm yiβ^wäränne
 käffät-ä-m yi-bärä-^wn-e
 開ける.PF-3.SG.M.SBJ-CONV 3.SG.M.SBJ-食べる.IMPF-3.SG.M.OBJ-PROS
 tizzägağğ
 tizzägağğ
 準備ができる.IMPF.3.SG.M.SBJ

「ハイエナは『何が子供を呼ぶのか⁵。俺はくお前を>⁶食うぞ』と言って、その口を明けて、まさにそれ(ヒヒ)を食べる用意が出来ている」

- (5) ta:wuš bädengahä tirähibb
 ta:wuš bä-denga-hä ti-rähibb
 どうか ~によって-子どもたち-POSS.2.SG.M 2.SG.M.SBJ-得る.IMPF

³ 「よいことをすれば、子供が困るようなことにならず、よいものをその子供から得られるだろう」ということ。

⁴ 末尾の i は存在しない可能性もある。

⁵ 「なぜ子供が関係あるのか」の意。

⁶ 調査時、AH 氏からは"-häyyäw"は"him"だ、との回答を受けたが、文脈及び冒頭部の"-hä"という形との類似からは 2.sg.m.OBJ と解釈するべきように思われる。本稿では筆者の誤解や AH 氏の言い誤りである可能性も考慮し、推測するにとどめておく。

- | | | |
|-------------------------|----|---------|
| b ^w aränm | ay | baräm |
| bar-ä- ^w n-m | ay | bar-ä-m |
- 言う.PF-3.SG.M.SBJ-3.SG.M.OBJ-CONV 否 言う.PF-3.SG.M.SBJ-CONV
- | | |
|------------|---------------------------|
| zälläläm | yi ^β aränne |
| zälläl-ä-m | yi-bärä- ^w n-e |
- 跳ぶ.PF-3.SG.M.SBJ-CONV 3.SG.M.SBJ-食べる.IMPF-3.SG.M.OBJ-PROS
- | | |
|---------|----------|
| e:llam | bädingät |
| e:lla-m | bädingät |
- 欲する.PF.3.SG.M.SBJ-CONV 突然
- | | | |
|------------|--------|-------|
| bafäwta | ač'č'ä | gäbba |
| bä-af-äwta | ač'č'ä | gäbba |
- ～に-口-POSS.3.SG.M. 木の枝 刺さる.PF.3.SG.M.SBJ
- 『「どうか、お前の子どもたちによって(よいものを)得る(のだから)」と(ヒヒは)こう言ったが、『否』とハイエナは言って、飛びかかって、それを食べようと欲して、(その時)突然その口に木の枝が刺さった」
- (6) ač'č'ä gäbbawä t'abb^wät'an
ač'č'ä gäbba-wä t'abbät'-ä-^wn
木の枝 刺さる.PF.3.SG.M.SBJ-"in it" 留める.PF-3.SG.M.SBJ-3.SG.M.OBJ
「枝はそこに刺さり、それを留めた」
- (7) bähi yawät'anä k'abbät'ä
bähi y-awät'-anä k'abbät'-ä
そして 3.SG.M.SBJ-取り除く.IMPF-3.SG.F.OBJ? 得られない.PF-3.SG.M.
「そして(ハイエナは)それを除こうとしたが出来なかった」
- (8) bähi yäzäng'yära min b^warän
bähi yä-zäng'yära min barä-^wn
そして ～に-ヒヒ 何 言う.PF.3.SG.M.SBJ-3.SG.M.OBJ
「それからヒヒに何を言ったか(というた)、」
- (9) bädengahä bahem bannä
bä-denga-hä bahem bannä
～によって-子どもたち-POSS.2.SG.M. 言う.PF.2.SG.M.SBJ+1.SG.OBJ AUX
『“ お前の子どもたちによって” とお前は俺に言っていた。』
- (10) ah^wä bāmin min yit'äk'il
ah^wä bā-min min yi-t'äk'il
今 ～によって-何 何 3.SG.M.SBJ-よりよい.IMPF

b^warän

barä-^wn

言う .PF.3.SG.M.SBJ-3.SG.M.OBJ

「では今は何によって何がよいものか』と言った(のだ)」

- (11) iyyä abbahä yäšäk^wätän k'ar
 iyyä abba-hä yä-šäkät-ä-^wn k'ar
 私 父-POSS.2.SG.M REL-行 う .PF.3.SG.M.SBJ-3.SG.M.OBJ こと
 min ähir baräm
 min ä-hir barä-m
 何 1.SG.SBJ-知る .IMPF 言う .PF.3.SG.M.SBJ-CONV
 gäff^wärännim zäng^yära säkk^yä
 gäffär-ä-^wn-m zäng^yära säkk^y-ä
 残す .PF.3.SG.M.SBJ-3.SG.M.OBJ-CONV ヒヒ 逃げる .PF.3.SG.M.SBJ
 yiβuri
 yi-βur-i
 IP-言う .IMPF-IP

『私があなたの父親がやったことの何を知っているのか(、いや、知らない)』と(ヒヒは)言って、彼(=ハイエナ)を残して、ヒヒは逃げた、そういう話である⁷」

4 テキストに見える目的語名詞句と標識

このテキストに含まれる、目的語名詞句を伴う他動詞の例は以下(12)-(14)の通りである。以下の例はすべてテキストからの抜粋である。なおグロスについては 3 節のテキスト番号を示しておくので、それを参照されたい。

(12) bat mädär [at g^wäčä]_{SBJ} [at zäng^yära]_{OBJ} [räkkäbä]_{Verb} (1)より

(13) [zäng^yarai]_{OBJ} [yiβ^wäränne]_{Verb} tizzägağğ (2)より

(14) [afäwta]_{OBJ} [käffätäm]_{Verb} (4)より

以下、それぞれの例について検討を加える。

第 1 の例(12)は主語・目的語ともに不定冠詞 *at*⁸がついていることから、不定の名詞句であることが分かる。この後の文脈から、どちらも特定のハイエナ/ヒヒを指している。有生性については人間以外の動物ということになるが、その後のテキストでこれらは人間のように言葉を交わしている。そのことからこのテキスト中ではハイエナ、ヒヒ双方が擬人

⁷ 文字通りには「そう言われている」となる。

⁸ 正確には不定冠詞のように働く数詞で「1」を表わす。

化されており、その点で通常の間人以外の動物を指す目的語とは同等に捉えられないかもしれない。この文については名詞句に目的語標示を付加する(12)'のようなヴァリエーションが許容される。その一方で動詞に付与される目的語一致標識は出現を許されない(12)". また目的語一致標識が許されないために、(12)'"のような二重標示もここでは許容されない。

(12)' bat mädär [at g^wäčä]_{SBJ} [yat zang^yära]_{OBJ} [räkkäbä]_{Verb}

←[yä-at zang^yära]

ACC-INDF ヒヒ

(12)" *bat mädär [at g^wäčä]_{SBJ} [at zang^yära]_{OBJ} [räkkäb^wän]_{Verb}

←[räkkäbä-^wn]

彼は得た-3.SG.M.OBJ

(12)'" *bat mädär [at g^wäčä]_{SBJ} [yat zang^yära]_{OBJ} [räkkäb^wän]_{Verb}

これに対し(13)は(12)で言及された zang^yära「ヒヒ」が定冠詞をとった上で目的語となる。この場合にも名詞に付加される目的語標示 yä が現れうる(13)'. また、(13)"、(13)'"から分かるように⁹、動詞に付加される目的語一致標識はこのとき脱落することが出来ない。

(13)' [yäzang^yärai]_{OBJ} [yiβ^wärän]_{Verb}

←[yä-zang^yära-i]

ACC-ヒヒ-DF

(13)" *[zang^yärai]_{OBJ} [yibärä]_{Verb}

←yi-bärä

3.SG.M.SBJ-食べる.IMPF

(13)'" *[yäzang^yärai]_{OBJ} [yibärä]_{Verb}

この(12)と(13)の対比から、次のことが指摘できる。すなわち、動詞に付加される目的語一致標識は目的語が定有的时候に要求され、そうでない場合には容認されない。ただし次に見るように、これはあくまでも zang^yära「ヒヒ」が目的語となっている場合に限られる。一方で名詞付加型の目的語表示はいずれの場合にも出現が可能である。どちらの例でもこの yä-は出現しうるが、テキスト本文では現れていないことから、出ないのが一般的であるものと考えられる。また(13)'はインフォーマント氏が自主的に「こう言うこともできる」と提供してくれたヴァリエーションであるのに対し、(12)'は筆者の側からそのような言い方が可能かと尋ねた結果得られたヴァリエーションであることも書き添えておく。この yä-については更にデータを集めて議論する必要がある。

⁹ 議論を簡略化するため、prospective の標識は省略する。

(14)は所有者の人称代名詞接尾形を伴い、意味的に定である身体部位を表わす名詞句が目的語となっている。この例については、動詞付加型の目的語一致標識だけが出現を容認され(14)'、名詞に付加する標示は出現できない((14)",(14)''')。

(14)' [afäwta]_{OBJ} [käff^wätänim]_{Verb}
 ←[käffätä-^wni-m]
 彼は開けた-3.SG.M.OBJ-CONV

(14)" *[yafäwta]_{OBJ} [käffätäm]_{Verb}
 ←[yä-afawta]
 ACC-彼の口

(14)''' *[yafäwta]_{OBJ} [käff^wätänim]_{Verb}

(14)'～(14)'''より示されるように、(14)の場合には動詞に付与される目的語一致標識が任意に出現するという点で(12)(13)とは異なる。これらの差異としては目的語の有生性が指摘できる。すなわち(12)(13)が人間以外の動物であるのに対し、(14)は身体部位ではあるもののそれ自体は無生物である。有生性が低くなると動詞付加型目的語一致標識の脱落が容認される、という現象は Hara(2018)でも指摘したことである。このことから、動詞に付加される目的語一致標識の出現についての Hara(2018)の仮説は維持される。また名詞に付加される目的語標識 yä-についても、有生性・定性の階層でより下位に位置する(14)の場合に出現が認められなくなる、ということは Hara(2018)の仮説と矛盾しない。しかし Hara(2018)のデータは無生物・定の場合の yä-の出現を認めないわけではなく、従ってここでこれが出現できないということについては何らかの説明が必要である。ひとつの仮説はこの名詞句が身体部位を指すことが関与する、というものであるが、これを説明するデータは現時点では無い。

5 まとめ

以上、本稿では現地調査から入手したマスカン語のテキスト *g^wäčänna zang^yära* 「ハイエナとヒヒ」を例に、マスカン語の目的語標識がどのように現れているか、およびその出現・非出現を左右するものとしては何が考えられるか、について検討した。その結果、1) 動詞に付加される目的語一致標識は、目的語名詞句が定である場合に現れることができ、それが無生物の場合には欠落が許されるが、有生物の場合には許されないこと、2) 名詞に付加される目的語標識は有生物を表わす目的語には現れうるが、無生物の場合には現れないということが観察された。このことは Hara(2018)の仮説に沿うものである。ただし今回の資料には目的語名詞句の用例が少なく、そのため詳細な記述には至らなかった。調査の進展と共により多様な用例から検討を深めていくことが期待される。

参考文献

- Aissen, J. 2003. "Differential Object Marking: Iconicity vs. Economy," *Natural Language & Linguistic Theory* 21(3): 435-483.
- Hara, S. 2018. " A Hypothesis on Differential Object Marking in Mäsqaṇ: In Relation to Object's Animacy/Definiteness," 『一般言語学論叢』 21: 65-85.
- Meseret E. 2012. Tense, Aspect and Mood in Mesqaṇ. MA Thesis, Addis Ababa University.
- (原将吾 筑波大学大学院生)

A Mesqan folktale with notes on differential object marking

HARA Shogo

This article presents a folktale in Mesqan, a Semitic language in Gurage zone, SNNPR, Ethiopia with some notes on differential object marking (DOM) in the language. The text is given in the former half of this paper with glosses and translation. In the latter half, I discuss DOM in Mesqan based on the data from the text and suggest that 1) the object marking particle on the verb can appear when the object is definite, and its dropping is allowed only for inanimate objects, 2) the object marker on nouns may be present with animate objects, while inanimate objects cannot take this marker. This observation does not contradict with the hypothesis proposed by Hara(2018).